

輪島市 震災・洪水被災地の視察研修 特集号(石川地区町内会長会主催)

～いのちを守る復旧・復興の道のりを訪ねて～



▲輪島高校にて（中央は平野校長先生）

令和6年度 石川地区町内会長会
会長(理事) 松田 博光

－はじめに－

昨年12月14日(土)に、能登半島地震での震災および洪水被害にあった輪島市を石川地区関係者17名で視察研修してまいりました。

今回、輪島市視察研修の特集号を発行することで、石川地区の皆さんの防災意識の高揚と減災への活動につながれば幸いです。

－平野輪島高校校長先生との意見交換－

当日は、石川地区振興協議会の表会長のはからいで、輪島高校平野校長先生に輪島市内各被災地を中心にご案内いただき、昼食も持参した弁当を輪島高校内でとらせていただきました。その後、平野校長先生から1月1日の震災で被災された、輪島高校生徒および住民の方々の復興経緯についてスライドを使って説明してもらいました。また意見交換を行い大変貴重なお話を聞かせていただきました。

一番印象に残り感動したのは、震災後3か月間学校に泊まり込み生徒達がどうしたら前を向いて生活できるかを真剣に考え、“震災の輪島から世界に向けて元気を発信していこう”との姿勢でした。実際に破損した校舎を見学し、すれ違った生徒から“こんにちは”と明るく挨拶してもらったとき、体育館の大きくうねった床の上で、一生懸命バスケット練習に汗を流している生徒の姿を見たとき、目から鱗の落ちる思いでした。

石川地区に住み被災の無い日常に慣れ、感謝も忘れがちな自分に対し、一生を左右する大災害に直面しても、明るく元気をくれる生徒に、どの様な指導をされているのか深い感銘を受けました。

－視察を終えて－

改めて石川地区の恵まれた環境を感じることができました。災害はいつ起きるとも予測が付きません。日頃からどうしたら被害を最小限に食い止めることができるか、今一度、自分達の防災に対する取り組みを考え直す機会を与えていただきました。

今回、この特集号に輪島市被災地の写真等も掲示して、改めて被災地の復興を祈ると共に、我々石川地区防災対策の構築に参考になれば幸いです。

最後に今回の視察研修に水島町の毎田グループ、クリーンライフ(株)白山工場さんから白山の水6箱(1箱500ml 24本)を無償提供いただき、輪島高校へ届けることができました。ありがとうございました。

石川地区振興協議会 会長 表 純一

元日の大地震、9月の豪雨災害に見舞われた令和6年の営みは、奥能登やこの石川地区の人々にとっても、永遠に記憶に残すとともに、後世に語り継がなければならない。

13年前、2011年3月11日の東日本大震災の際のこと。何度も地震や津波に襲われてきた三陸沿岸では、1896年の明治三陸地震を機に「津波てんでんこ」という標語を掲げ防災訓練を続け、犠牲者を一人も出さずにすんだ地域もあった（釜石の軌跡）。その一方で多くの老若男女が犠牲になった地域もあった。この差はどこから出たのだろうか。1896年とは明治29年。明治以降最大の手取川大洪水があった年。当時の七ヶ用水は用水ごとに手取川から直接取水しており、その分小さく脆弱であったため、そのほとんどが決壊し昭和9年の洪水以上の大きな被害が生じたという。前年の明治28年に手取川上流部に取水口を一本化する計画が決定されていたが、間に合わなかった。七ヶ用水は教訓を生かして改良を加えているが、我々下流域の住民はどのような教訓を得て今に生かしているのだろうか。



▲朝市の火災跡地

今回の輪島視察においては、土砂崩れや地滑り、河川に放置されたままの倒木の数々、山中毅氏が泳いだ海水プールの4メートル近い隆起、朝市通り沿いの広範な火災跡、豪雨に見舞われた仮設住宅などの状況が目に見え付けられている。

そうした被害の中から立ち上がろうとする若い高校生の取組もお聴きすることができた。高校2年生の数人ずつのグループが震災後の輪島をどう元気づけるかの策を考え、実行し、地域の人はもちろん、輪島に来ていた OECD の人たちもその輪に加わってくれたとのこと。

この取組の土台となったのは、10数年前から取り組んできたポスターセッションという活動で、自分たちの興味関心ある身近な課題を様々な角度から創意工夫を凝らして発表し、大人や同級生から出た質問・意見にも、自分たちで応答し、行動力や発表力を養い高めているという。若い人の元気な活動は、地域再興の希望になるに違いない。こうした何気ない取組でも長く続けていくことで、それが伝統となり、地域起こしの原動力に繋がっていくのだと強く感じた。また、輪島では神社の祭りに際し、ある年齢の男たち(壮年)が一定期間集まり精進潔斎し、祭りの諸準備に関わるという伝統もある。そこで培われた仲間同士が助け合い、知恵を出し合うという心の基盤も強く残っており、それが今回の被災からの復旧・復興、さらには経済活動の新たな展開においても、大きな力を発揮していくことと信じたい。

さて、石川地区で、どのような取組や伝統を、継続的に多くの人たちが参画し進めていけばよいのであろうか。ここが知恵の出どころであり、正念場であると覚悟し、防災活動の基盤となる人づくりにも取り組んでいきたい。

石川商工会 会長、
コミュニティクラブいしかわ
副会長 佐武 英昭

行く道中、中能登辺りから瓦屋根にブルーシートが目立ち始め里山街道には、トレーラーダンプがここ十数年見たこともないほどの碎石を山積みにし、凄いスピードで自分たちのバスを追い越していきました。対向車線を見ると廃材を山積みにしたトレーラーダンプも凄いスピードで金沢方面に走っており、1分1秒の時間を惜しんで、石川県全体で復旧に力を入れているのがわかりました。



▲碎石を山積みにしたトレーラーダンプ

穴水駅で輪島高校の平野校長先生と待ち合わせし、輪島まで行く道中では、がけ崩れの山肌に建設機械が中吊りになっていたり、倒れた樹木が重なり合って住宅の瓦屋根を直撃しており、見るも無残な光景が広がっていました。

輪島市内に着き袖ヶ浜海水浴場に案内され、がけ崩れでふさがれた道路や約 4m 隆起した岩場を見た時は自然の力は凄いと思いました。

その後、火事になった朝市跡を見学しました。本当に土しか残っておらず、広大な更地には建設機械が入り、作業している光景を見た時は非常に悲しい気持ちになりました。

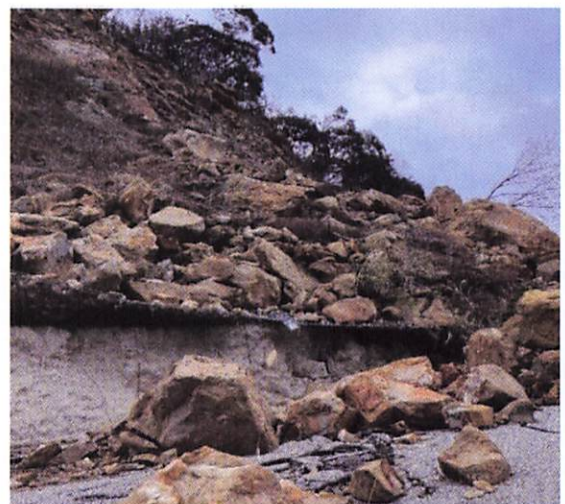
その後、輪島高校の被害も見せていただきました。鉄筋コンクリートの体育館の床が隆起している状況でも、普通に部活動が行われていました。どんな状況に置かれても、やるべき事はするのだという強い気持ちが窺われました。

平野校長先生の講義で、被災して学校が避難所になった時、一番に必要なものが紹介され、1～2日目は、水、毛布、懐中電灯、モバイルバッテリーで、3日目に初めて食事、トイレということを聞かされて意外に思いました。

その中で「外履きと内履き用のスリッパがあること」と「トイレをみんなで協力して掃除をすること」は避難所を清潔に保たつことができ、感染症を防ぐ上でとても大事なことだとわかりました。

最後に大事なことは？と質問したところ、“明るい未来に向かって思いを語ること”とのことでした。

やはりテレビ、SNS で見るよりも実際に被災地に足を運んで見て、被災した人の話を聞き、強烈な印象を受けました。そして、これからいつか来るであろう災害に向けての準備が大事だと痛感しました。



▲袖ヶ浜海水浴場のがけ崩れた道路

「赤いランドセルとセーラー服、 災害を乗り越えた日常」

2024年1月1日に発生した能登半島地震をはじめ、9月21日の豪雨による被害で輪島高校が直面した災害の影響について、平野敏校長の話を通じて、学校および地域社会の復興の様子がわかってきました。特に、震災後の生徒たちの思いや絆を象徴する心温まるエピソードが印象的でしたのでご紹介します。

1. 能登半島地震の影響と復興の過程

2024年1月1日に発生した能登半島地震により、輪島高校を含む地域では多くの家屋が倒壊し、生活基盤が大きく損なわれました。学校も被害を受け、生徒や教職員は多くの困難に直面しました。



▲輪島高校 平野校長先生

2. 震災後の希望と日常の回復

震災後、ある母親が倒壊した自宅から娘のセーラー服を大切に持ち出し、その服を着て登校した生徒がいました。このエピソードは、復興の過程における象徴的な出来事となりました。このセーラー服は、単なる制服以上の意味を持ち、家族や学校、地域とのつながりを象徴し、震災で失われたものを少しずつ取り戻す希望を表現しました。

3. 希望のシンボルとしてのセーラー服

このエピソードは、復興の過程における「日常」の回復がどれほど大きな意味を持つかを示しています。制服を着て学校に通うことができるという、当たり前のことができるようになることは、被災者にとって非常に大きな希望となります。

セーラー服はその希望の象徴として、困難な状況にあっても希望を見出し、復興を進める力を感じさせるエピソードです。

また、阪神・淡路大震災の時には、ある母親は、自宅が崩れかけた状況で、我が子のランドセルだけは持ち出さなければと、必死になって瓦礫の中から取り出しました。この母親の思いには、「どんな状況でも子どもには、学校へ行ってほしい」「勉強を続けさせてあげたい」という強い願いが込められていました。震災で生活が一変し、何もかも失ってしまった中でも、ランドセルは子どもの未来を守る象徴だったのです。



▲輪島高校正面玄関前の『青春の立像』

4. 地域社会の絆と復興

能登半島地震後、地域社会や家族の絆が強く感じられました。困難な状況でも、人々は互いに協力し合い、日常を取り戻すために努力を続けました。このような小さな奇跡や心温まるエピソードが積み重なることで、地域全体が少しずつ復興していく様子が伺えます。

結 論

輪島高校のエピソードは、災害後の復興において、家族や地域の協力、そして希望の力がどれほど大切であるかを再認識させるものです。困難な状況においても、少しずつでも日常を取り戻していく過程には、希望と絆が重要な役割を果たすことが分かります。このようなエピソードを通じて、復興の力強さと、災害を乗り越える力が地域社会に根付いていることを改めて確認することができました。